研究ライブラリー / レッスン 23

尋問のもとで作られた自白を読む

発言者、記録、供述の条件

01 誰の発言かを定める

02 比較する

03 文脈に置く

学習、解説付きの資料、テーマ別の参照。
事例資料、演習、理由を示した解答を収録。

The Method Files / 研究 / レッスン 23

学習の進め方

イゾベル・ゴウディを検討します。帰属、尋問、反復、編集による媒介を扱い、解説付きの事例資料、課題、参照用の資料を収録しています。

始める前に
1. 一人称の背後にある四つの問い
2. イゾベル・ガウディ――一つの事例と複数の仲介
3. 発話から、読むことのできる文書へ
4. 質問を創作せずに探す
5. 語を無理に振り分けずに声を認識する
6. 圧力、自発性、診断の限界
7. 反復、再確認、裏付け
8. 非日常的なものを歴史の問題として読む
9. 架空の調査資料――「ニレの家」の供述
10. 調査資料を段階的に解く
11. 手順を示した演習――過剰な主張を訂正する
12. 自分で取り組む練習と解説付き解答
13. 課題――自白と読解の調査資料
14. 用語集と記述上の判断
15. 参照：主張を分け、根拠を示す
16. 参照：知覚、記憶、語り
17. 参照：沈黙と情報の状態
18. 参照：人物、供述の回、文書
19. 参照：保存と代表性
20. 参照：研究を読み、人物を見失わない
21. 参考資料と調査の道筋

架空の事例は演習であることを明記しています。活動には理由を示した解答を付けています。角括弧内の参照番号は第21節の資料に対応します。

日本語版です。日本語に合わせてページを組み直しています。目次としおりから、このＰＤＦの各節へ移動できます。

始める前に

書かれた自白は、過去の人物に特別に近付ける資料のように見えます。一人称で語り、場所を挙げ、行為を説明しているからです。しかし、この近さは誤解を招くことがあります。残された文書は、ある伝達状況、書き記す作業、伝承の歴史から生まれています。読むことを学ぶには、供述が記録された人物を消し去らずに、この三つに注意する必要があります。このレッスンでは、証言の歴史的価値を保ちながら、それに基づいて構成できる主張の範囲を限定する読み方を示します。

参照する事例は、1662年、スコットランドのオールダーンでイゾベル・ガウディに帰された自白です。その超自然的な語りが実際に起きたかを決めたり、接近できない内面の体験を再構成したりすることは目的ではありません。問いは資料についてのものです。権威者の前で作られ、写し、版、研究を通して知られる自白にある主張について、何が分かるでしょうか。語られた出来事、記録された供述、記録の行為、後世の解釈を区別します。それぞれに異なる論拠が必要です。

学習後には、供述から出版物へ至る連鎖を記述し、一節の中の声と表現の確かさ・可能性などを区別し、繰り返しを独立した証人として数えずに各回の供述を比較し、告発を事実に変えない結論を書けるようになります。また、何を知らないのかを正確に説明することも学びます。検索の範囲を示し、考えうるすべての文書館についての主張と混同しなければ、参照した資料群では結末が分からないと書くことは、確かな資料上の結論になりえます。

前半では、問題と一式の架空の調査資料を詳しく扱います。その後に、解答付きの練習、課題、参照用の手法を用意しています。末尾の各節は、この資料室の他のレッスンの方法論的な資料を応用したもので、各導入でその旨を示しています。この巻を単独で使えるようにするために収録しており、ガウディについての新しい資料ではありません。演習の場面、名前、発言は、帰属、依存関係、解釈の限界を練習するために作った教育上の創作であり、そのことを明示しています。

三回に分けて取り組んでください。第1回は調査資料まで読み、関係を図にします。第2回は解答を見る前に練習を解きます。第3回は調査記録を作成し、参照ノートで自分の判断を見直します。スコットランドの語彙を暗記したり、事例の特定の解釈を採用したりする必要はありません。必要なのは、各主張の出所、含まれる仲介者、どの情報によって見直しを迫られうるかを示すことです。

1. 一人称の背後にある四つの問い

「私はそこにいた」という文は、発話の立場を含みますが、それだけで、発言者がその場所に実際にいたことを保証しません。司法資料では、誰が話し手として現れ、誰が記録し、誰に供述が向けられ、それによって何を確定しようとしているかを問わなければなりません。版が代名詞を残しながら、作成の

文脈を除くこともあります。そうなると読者は、文書が正当化できる以上に、直接触れているという印象を受けます。

四つの問いを区別するとよいでしょう。第1は本文についての問い、「目の前の一節は何を主張しているか」です。第2は資料についての問い、「その主張はどのようにこの書かれた形に至ったか」です。第3は歴史についての問い、「本文の外にある出来事、信念、実践とどのような関係にあるか」です。第4は歴史研究についての問い、「他の読者はこの一節をどう用いてきたか」です。一つに適切に答えても、他が自動的に解けるわけではありません。文を正確に転記できても、実際に行われた行為を語っているかは分からないままかもしれません。

ある女性が隣人にリボンを渡したと述べる架空の供述を想像してください。調書は、その受け渡しが供述の一部として記録された証拠です。物理的な受け渡しを証明するには、独立した証言、関係する同時代の記録、確かに関連付けられた物など、別の論拠が必要です。リボンの意味を調べるには、さらに文脈が必要です。名前や細部が語られているというだけで、残された文から歴史上の実践へ進めるわけではありません。

仲介があるからといって、すべてが書記の創作になるわけでもありません。それは逆の誤りです。記録は、語彙、人間関係、語り方、制度上の期待について、重要な情報を残す場合があります。変わるのは、それを誰に帰するかという方法です。「本人はまさにこう考えていた」の代わりに、「現存する供述では、この説明が本人のものとして記されている」と書けます。後者は、声、書記行為、体験の関係を未確定のまま保ち、分析全体を崩さずに新たな証拠を加えられるようにします。

扱える大きさの単位

小さな主張ごとに作業してください。「被告は自由に自白し、古い儀礼を説明し、処刑された」は、少なくとも、作成条件、実践の系譜、司法上の結末という三つの問題をまとめています。語りを記録する資料が、他の二つをどちらも解決しないことがあります。文を命題に分け、それぞれに参照先を割り当ててください。裏付けのない部分を、別の部分を支える引用の陰に隠してはいけません。

分析は、調べる表現、それを帰される主体、参照した媒体、残された文脈、提案する推論という五つの欄をもつ記録から始めます。欠けているもののために第6の欄を加えてください。この最後の欄は、暫定的な読みが別の仕事に写された際、無条件の確実性へ変わることを防ぎます。見えることと推論することがどちらも明白に思える場合でも、その距離を保つことが重要です。

> **一人称は、文書内の一つの声を示します。**その声と歴史上の体験の関係には、追加の分析が必要です。

2. イゾベル・ガウディ——一つの事例と複数の仲介

出発点の資料群は、1662年のオールダーンでガウディに関連付けられた四つの供述です。豊かな語りは、非常に異なる読みを生んできました。このレッスンの基礎情報は限られています。魔女術の告発という文脈で作られた一群の供述、ロバート・ピトケアンによる19世紀の出版物、本文がどう作られたかを検討する現代の研究があるということです。目を引く語りを、超自然現象の確認や、内面の完全な伝記に変えることはしません。

ピトケアンの1833年版と1662年の記録は、異なる時点に属します。Museum of Witchcraft and Magicの目録は、その出版物に由来する自白の写しを特定しています。この参照によって伝承の一経路を認識できますが、すべての伝本の物理的な比較の代わりにはなりません。刊本から得た読みを引用するなら、その刊本を特定してください。研究が写本を参照している場合、その情報を、自分が原本を観察したものとして提示してはいけません。[1]

エマ・ウィルビーは、これらの自白を扱う研究書を著しました。JSTORで利用できる版の出版紹介は、失われたと考えられていた記録の再発見と、ガウディの寄与を尋問者の寄与から区別する目的を説明しています。また、幻視的な伝統についての解釈も提示していますが、これは著者の解釈として示す必要があります。参照した紹介には真正性の確認過程への言及がありますが、それを根拠に、このレッスン独自の判断で後の結果や写本の調査を主張することはできません。[2]

この慎重さは有益です。現代の参考文献は、古い刊本しか利用できないという考えを訂正する場合がありますが、訂正には日付と出所を伴わせる必要があります。資料へのアクセスの歴史も調査の一部です。資料が再発見される前の研究者は、その後の研究者と必ずしも同じ可能性をもっていませんでした。結論を比較するには、利用できた資料群、問い、読み方も比較する必要があります。

未解決のこと

ここでは、司法上の結末を推測で決めません。同じような状況で告発された他の人が特定の刑を受けたとしても、ガウディ個人の運命は証明されません。文脈に基づく蓋然性は、判決文や処刑の記録とは異なります。責任ある表現は範囲を限定します。このレッスンで検討した資料群では、結末を確定しないということです。先へ進むには、固有の証拠を特定し、同じ人物と同じ手続に対応するかを確認する必要があります。

完全に自発的な声か、権威者による全面的な創作かという二者択一もしません。最初の読みを導くには、どちらも硬直しすぎた極端です。行うのは、帰属させる、質問する、記録する、要約する、再確認する、編集する、解説するという作業を認識することです。資料で確かめられるものもあれば、代替説明としてしか挙げられないものもあります。各語を歴史上の話し手に完全な確信をもって割り当てられなくても、供述がどう流通したかを説明できる場合があります。

3. 発話から、読むことのできる文書へ

供述	記録	版
声と帰属	質問と書記行為	伝承と読解

口頭の供述は時間の中で進みます。中断、繰り返し、沈黙、身振り、書き残されない働き掛けへの応答を含む場合があります。調書は、持続する媒体に情報を整理します。要約し、順序を整え、手続を担う人々になじみのある定型表現を使う場合があります。さらに版は、転記、句読点、配置、注釈についての判断を通して、その本文を他の読者に届けます。この道筋を、自動的に真実が失われる過程としてではなく、特定すべき一連の作業として記述する必要があります。

同時代の記録と後世の写しを分けてください。写しが、すでに失われた文書を丁寧に残していることもあれば、原本が読みにくかったり、不完全だったりすることもあります。「原本」と「信頼できる」は絶対的な同義語ではありません。早い時期の伝本の利点は問いによって異なります。訂正や筆跡を調べられる場合もあれば、批判校訂版が一枚の画像では見えない異読を提供する場合もあります。すべての媒体を普遍的な尺度で並べる代わりに、何を何のために使うのかを説明してください。

句読点にも注意が必要です。句点が、続きの発言を独立した回答に変えることがあります。現代の引用符が、写本には示されていない逐語性を示唆する場合もあります。段落が、以前は続いていた二つの出来事を分けたり、異なる時点の供述をまとめたりすることもあります。これらの可能性だけで、編集者が内容を不当に操作したと非難することはできません。確認のための問いです。編集方針を参照し、必要に応じて、従ったとする伝本と提示の仕方を比較してください。

知的な資料継承の連鎖

各箇所について、帰属された供述、それを含む文書、参照した伝本や版、使用した翻訳、読解を導いた解説という最低限の経路を記録します。始める前に伝承全体を解明する必要はありません。見えない飛躍を避ければよいのです。論文に引用された翻訳しか読んでいないなら、アクセスはこの二つの仲介を通っています。その範囲に見合う使い方はできますが、調査資料からの直接の転記と記述することはできません。

適切な注記は、確認と参照先の提示を区別します。「指定された頁でこの記述を確認した」は、自分の作業について伝えます。「この研究は別の伝本を参照している」は、他者の作業について伝えます。両方とも有用で、併記できます。問題は、すべてのつながりを点検したと読者に思わせる表現に融合することです。追跡可能性は全知を求めません。たどった経路の、誠実で十分に正確な記述を求めます。

作業	確認の問い	それだけでは導けない結論
記録する	回答を引き出した働き掛けは残っているか。	すべての文が自発的に生じた。
写す	どのモデルと異読が知られているか。	どんな違いも偽造である。
編集する	どの基準が説明されているか。	句読点が発話と同時代のものである。
翻訳する	どの語と表現の確かさ・可能性などが保たれたか。	対応が完全である。

4. 質問を創作せずに探す

尋問では、質問より回答が詳しく残ることがあります。突然名前を列挙し、日付を特定し、関係を説明し始める供述は、やり取りの手掛かりになります。しかし、手掛かりは失われた質問の転記ではありません。列挙は供述者の自発的な行動や、記録の再整理による可能性もあります。作業は、変化を記述し、代替説明を立てることであって、想像した対話を文書記録の一部のように書くことではありません。

簡単な方法では三段階を使います。まず、「本文が移動の語りから参加者の一覧へ移る」という観察を示します。次に、「その変化は人物の特定を求められたことと矛盾しない」という仮説を立てます。最後に、「参照した一節には具体的な質問が残っていない」という限界を示します。こうすれば読者は、どの部分を確認でき、どの部分が推論に依存するかを理解できます。明示的な質問を含む記録が現れたら、以前の読みが暫定的だったことを隠さずに比較できます。

質問の内容も重要です。「その後、何が起きたか」と「誰が一緒だったか」では、開かれる回答の範囲が異なります。後者は同伴者の存在を前提にしています。架空の練習では、両方の表現を比較し、考えられる効果を説明できます。歴史上の事例では、証拠なしにどちらも帰することはできません。この区別により、分析上の可能性を特定の人物に起きた事実に変えずに、やり取りが語りをどう方向付けるかを教えられます。

痕跡と代替説明

再開、再確認、説明の明確化を示す定型表現は、手続の段階を示す場合があります。動詞と主語を調べてください。「本人に読み聞かせた」は「本人が付け加えた」とは異なる作業を示します。「前の内容を再確認した」は別の内容を指すため、それを特定する必要があります。「再び自白した」は記録者による特徴付けかもしれません。記録票に文言を写し、考えられる機能を説明してください。より複雑なやり取りを要約したものかどうか判断できないなら、不確かさを残します。

圧力を確認する痕跡だけを探してはいけません。仮説の限界も探してください。残る質問より前にある主題が現れているなら、その導入についての議論は変わりますが、完全な自由は証明されません。回答が前提を拒むなら、質問と返答の重要な違いが記録されています。文書全体を常に同じ結果を生む装置

へ還元せず、抵抗、交渉、理解の行き違い、自発性を見いだせるとき、批判的な読みは改善します。

質問がないことは、文書の種類の特徴かもしれません。調書は会話全体の再現ではなく、事件資料に有用な供述を残す目的だった可能性があります。省略を例外とみなす前に、同じ種類の文書を比較してください。その比較は文脈に即したものにとどめます。他の記録が似た形式を使うからといって、各回が同じように行われたことや、作成者がまったく同じ指示に従ったことは示されません。

5. 語を無理に振り分けずに声を認識する

供述者に帰される声、記録を構成する声、後に解釈する声を区別できます。それぞれの中にも、別の人に由来する材料が含まれる場合があります。供述は噂を含み、書記は被告女性の言葉を取り込み、編集者は手続の定型表現を残して注を加えます。本文が完全な分離を許すとは限りません。分析の目的は、認識できる層を見えるようにし、証拠以上に精密な帰属を避けることです。

まず、発話と認識を示す動詞に注目します。「言った」「聞いた」「思い出した」「推測した」「誰かが言っていたと述べた」です。これらの違いは、証言の射程を変えます。「ある人が到着するのを見た」と「ある人が到着したと聞いた」は、出来事との同じ関係を示しません。翻訳が両方を「知っていた」に変えれば、情報が失われます。文が短くなくなっても、誰の発言を誰に帰しているかという連鎖を保ってください。文体上の簡潔さのために、知覚、噂、推論の距離を消してはいけません。

次に分類を見ます。「契約」のような語は、権威者による分類、本人に帰された表現、編集上の題名として現れます。三つとも歴史的に興味深いものですが、互いに置き換えられません。現代の見出しにある語を、本人がその語で自己記述したことの自動的な証拠にしてはいけません。記録された回答にある場合も、完全に自律的な自己定義として示す前に、やり取りと伝承を検討する必要があります。

変更できる注記

各断片に、帰属された声、記録の定型表現、残された働き掛け、編集者の解説、帰属不明という簡単な作業用ラベルを付けられます。これらは自分のノートのためのもので、引用の代わりでも、当事者が使った歴史上の分類でもありません。変更可能であるべきです。新しい比較で、ある文がすでに写本にあったと分かれば、内容についてのすべての観察を作り直さずに、帰属を変えられます。

根拠のない精密さの危険があります。測定できる基盤がないのに、各文の真正性を百分率で割り当てることです。「70パーセントは民衆の声」と言えば科学的に見えますが、確認可能な作業を何一つ説明していません。帰属された地域の語彙、共有される定型構造、明示的な質問、特定された編集上の関与など、具体的な要素を記述するほうがよいでしょう。他の人がまったく同じ判断を見直せるなら、質的な説明も厳密でありえます。

個人の声を文化から自由な純粋物として扱ってもいけません。人は学んだ言葉、共有する語り、社会的な期待を使って話します。既知のモチーフを見つけても、尋問者が導入したとは証明されません。特有の細部を見つけても、文字どおりの体験に由来するとは証明されません。文化的な表現の蓄積と個人の自発性の関係は調査すべき問いであり、制度的な模写と絶対的な自発性の対立より、細やかな論拠を必要とします。

6. 圧力、自発性、診断の限界

供述の条件は、資料に記された身体的暴力の有無だけには還元できません。手続には、権威の不均衡、不利益を示す脅し、依存関係、質問の反復、受け入れられる回答についての期待が含まれる場合があります。これらは調べるべき分析上の側面です。一般的な重要性があるからといって、ガウディの事例でそれぞれが特定の形で存在したとは示されません。問いの候補と確認済みの事実の一覧を、常に区別してください。

「自発的」という語は、文書内の用法に即して読む必要があります。手続上の基準で供述を特徴付けている場合があり、圧力のない会話という日常的な理解とは異なるかもしれません。完全な自由と訳す前に、誰がその語を書き、何と対比し、資料群からどの事実を確認できるかを問いましょう。定型表現だから無効になるわけではありませんが、その回の物理的な条件の記述に代わるわけでもありません。

アラリック・ホールは、スコットランドの裁判における言語と信念の研究で、拷問がなかったという文言から、あらゆる強制の不在を推論してはならないことを指摘しています。その分析は、文脈の中で語の意味を調べると解釈がどれほど変わりうるかも示します。ここでは言語と資料の批判的検討の例として使い、記録で確かめていない特定の圧力の方法をガウディに帰す許可としては使いません。[3]

二つの近道を避ける

第1の近道は、拷問の記録がないから自白は真実だと述べることです。この結論には、ある条件についての沈黙からその不在へ、その不在から語りの正確さへ、という二つの飛躍があります。第2の近道は、不均衡な関係があったため、供述のすべてに価値がないと述べることです。不均衡があるなら、情報がどう生まれたかを調べる必要がありますが、あらゆる歴史的な問いに対する有用性が自動的に消えるわけではありません。

同じ文が、異常な出来事の証明にはほとんど役立たなくても、告発の分類を調べるには大きな価値をもつことがあります。名前の一覧は、挙げられた全員の実際の参加を証明しなくても、文書が誰を疑惑のつながりに含めるかを示せます。結果を提示する際、この違いを保ってください。考えられるすべての用途に対して、資料に一つの真偽判定を与えることはできません。

語りの鮮やかさから歴史上の人物を診断してはいけません。また、診断がないことを超自然的な体験の証明に変えてもいけません。資料の調査は、臨床的・形而上学的な問題を解決せずに、語り、分類、条件を記述できます。研究が心理学的・人類学的な解釈を提案するなら、誰の解釈かを示し、使う証拠を検討してください。説明のラベルが、資料の言葉の中に明白に含まれているかのように提示してはいけません。

7. 反復、再確認、裏付け

一人の四つの供述は、四人の独立した証人ではありません。異なる情報を加え、変化を示し、手続の展開を調べられる場合があります。しかし、以前の発言、前回の調書の読み聞かせ、それを補うための質問に依存している可能性もあります。文書の数と独立した情報源の数は、異なる問いに答えます。独立性が論拠に関わる場合は、両方を別々に数える必要があります。

反復は、表現が持続していることを意味する場合があります。再確認は、制度的な確認作業を記録する場合があります。新しい語りは、以前にはない要素を追加する場合があります。どの観察も、記録の外で何が起きたかを決めるには不十分です。正確に比較してください。繰り返されるのは、語、出来事、関係、それとも一般的な分類だけでしょうか。第2回は第1回を参照していますか。両方が同じ詳しさで残っていますか。これらを問わなければ、一致の表が裏付けを誇張することがあります。

現代の要約が刊本を写し、その刊本が二つの調書を再録し、第2の調書が第1を再確認しているとします。読む対象は四つありますが、依存の連鎖があります。四つすべての引用は伝承の研究に役立ちますが、語られた出来事の証拠を自動的に増やしません。文書間に矢印を描き、写し、要約、引用、再確認、不確かな関係という既知の関係を、それぞれの矢印に記してください。疑わしい矢印は、不確かなものとして見えるようにしておきます。

説明すべき変化

異同は、明確化、省略、言い換え、編集上の関与によって生じる場合があります。原因を選ぶ前に、記述することから始めます。ある回に新しい名前が現れたら、「現存記録のこの箇所で名前が加わる」と書いてください。直ちに「本人がようやく思い出した」「尋問者が押し付けた」と書いてはいけません。どちらも、やり取り、記録、伝承についての追加情報を必要とします。

矛盾も、最も詳しい版を選べば解けるわけではありません。細部は、後の質問、真正な補足、再整理に由来する可能性があります。各版の機能と時間的な関係を比較してください。両立しない二つの表現を残し、資料群では選べないと示すことが、正しい結論になる場合もあります。適切な調査資料にも食い違いは含まれます。その質は、食い違いを示し、可能なところまで説明することによって決まります。

発見	主張できること	確認が残ること
二回に同じ出来事がある	記録に反復がある	独立性と反復の条件
明示的な再確認	確認が記録されている	どの本文が読まれ、どう確認されたか
名前の追加	残された内容が変わる	追加の由来
後の要約が一致する	ある読みが継続する	同じ文書に依存しているか

8. 非日常的なものを歴史の問題として読む

通常の知識では不可能な変身、出会い、行為の語りがあっても、歴史家が文字どおりの信奉か軽蔑かを選ぶ必要はありません。どのように構成され、どんな関係を設定し、どんな語彙を用い、どの状況で記録されたかを調べられます。これらの問いは、語りを能力の証明に変えたり、人物を戯画化したりせずに、文化と資料についての知識を生みます。敬意は、すべての主張を出来事として受け入れることではなく、丁寧に検討することを求めます。

語りの鮮やかさには、具体的な場面、名前、順序、感覚的な細部、認識できる関係という複数の要素があります。これらは、記憶、物語、噂、教説、圧力下での再構成に現れることがあります。したがって、鮮やかさは文字どおりに起きたことの独立した証拠にはなりません。また、すべてが創作だと推論することもできません。語りが、責任を整理し、参加者を位置付け、不幸を説明し、出来事を結び付けるなど、何をしているかを記述してください。その後、どの外部証拠でそれらの関係を調べられるかを問います。

ガウディの資料には、研究者が魔女術や妖精的存在についての信仰に関連付けるモチーフが共存します。その分類は役立つ場合がありますが、分析上の分類であることを保つ必要があります。同じ現代的なラベルに入れた二つのモチーフが、すべての話し手に同じ意味をもったとは限りません。比較では、語、語りの連続、機能、解釈の何を比べるかを正確にする必要があります。他の伝統との一般的な類似だけでは、歴史的な連続性や接触は確立されません。

儀礼を再構成したくなる誘惑

司法上の語りは、行為や定型句に言及することがあります。それらを集め、並べ、他の本文で補えば、現代の構成物ができます。それは文書そのものとは異なり、その旨を示す必要があります。学術的な読みは、現代用の実行手順を示さずに、記録が誰かに帰する内容を記述できます。順序、条件、文脈が欠けているなら、欠落を残してください。実行可能にするために手順を補うと、研究対象を変え、告発に由来することを隠す場合があります。

共同体の歴史にも同じ注意が必要です。文書が参加者を列挙していても、現在の読者が期待する特徴をもつ安定した組織の存在は証明されません。帰属されたつながり、司法上の分類、別種の関係を記録している可能性があります。歴史上の集団を調べるには、記録されたつながり、活動、文脈が必要です。自白内の関連付けは、確認を要する出発点であり、名指された全員に遡って割り当てられる所属ではありません。

有用な結論は、控えめでありながら豊かにもなれます。「文書は特定のモチーフを集め、手続上の供述の中で組み立てている。実際の実践との関係は別に検討する必要がある」という表現です。この文は資料を空虚にしません。言語、分類、社会関係、伝承、受容という複数の調査を開きます。深さは、すべての問いを一つの派手な説明に置き換えることではなく、問題を区別し、それぞれに証拠を構築することで生まれます。

9. 架空の調査資料——「ニレの家」の供述

以下の事例は完全な創作です。ガウディの裁判を再現するものでも、特定の歴史上の法廷の条件を再構成するものでもありません。依存関係を練習するために四つの文書を設計しました。架空の主人公はイネスです。問題は「ニレの家」での集まりをめぐります。集まりが実際にあったかを決める必要はありません。各文書から何を主張でき、情報の流通に伴って何が変わるかを確かめる必要があります。

文書A、第1の記録。見出しには、イネスが地域の権威者と書記の前で供述するとあります。本文は、家での集まりについての会話を聞いたという発言を彼女に帰しています。誰からその話を聞いたのかは特定していません。その後、そこにいた人について質問されたことを示す定型表現に続いて、三人の名前が列挙されます。末尾には、イネスに帰される同意表明があります。署名も、どのように同意を得たかについての情報も残っていません。

文書B、五日後の第2の記録。イネスに前の文書を読み聞かせ、彼女が内容を再確認したものの、第3の人物の出席は確言できないとしたことを記しています。聞いたと述べる会話に出てきた人物として、第4の名前を追加しています。集まりの直接の観察は記述していません。末尾にはAと似た同意の定型表現があります。どちらの回にも、質問の完全な転記はありません。

文書C、数十年後に作られた写し。AとBを再録していますが、写字生が「集まりの参加者」という欄外注を置いています。注は四つの名前の横にあります。二つの名前の位置付けが異なることは説明せず、注を一つの記録だけに限定する明確な記号もありません。写しは、前の文書に由来すると明示しています。後世のアクセスを調べる価値は明らかですが、この教材では、集まりの証言としての独立性はありません。

文書D、現代の出版物。Cを要約し、イネスが四人の出席者を特定し、その出席を二度確認したと述べます。著者はAやBを直接引用せず、写しを参照しています。要約では、会話を聞いたことと集まりに出席したことの違いを省いています。第3の人物についての留保も省いています。この出版物は受容を調

べる新しい対象ですが、出席者についての主張は、資料群の他の部分と比較できる読み方に依存しています。

最初の解き方

二つの一覧を作ってください。第1には資料上の事実を挙げます。Aは聞いた情報をイネスに帰し、Bは留保付きの再確認を記録し、Cは注を加え、Dはより断定的に要約しています。第2には、証明されていない外部の出来事、すなわち集まりの実際の開催、各人の出席、参加者の意図を挙げます。この資料群は第1の一覧を詳しく分析できますが、第2を自動的に事実についての語りへ変えることはできません。

次の図版は、これらの関係を表します。文字は練習内の文書を識別するもので、文書館の資料ではありません。新しい媒体に移っても、情報の独立性は増えないことに注目してください。正確さも変わります。Cの注は、AとBが異なる扱いをしていた名前をまとめ、Dは留保を除いています。その変化の正確な位置を見つけるほうが、連鎖全体を真か偽かで分類するより有用です。

架空の調査資料を図で読む

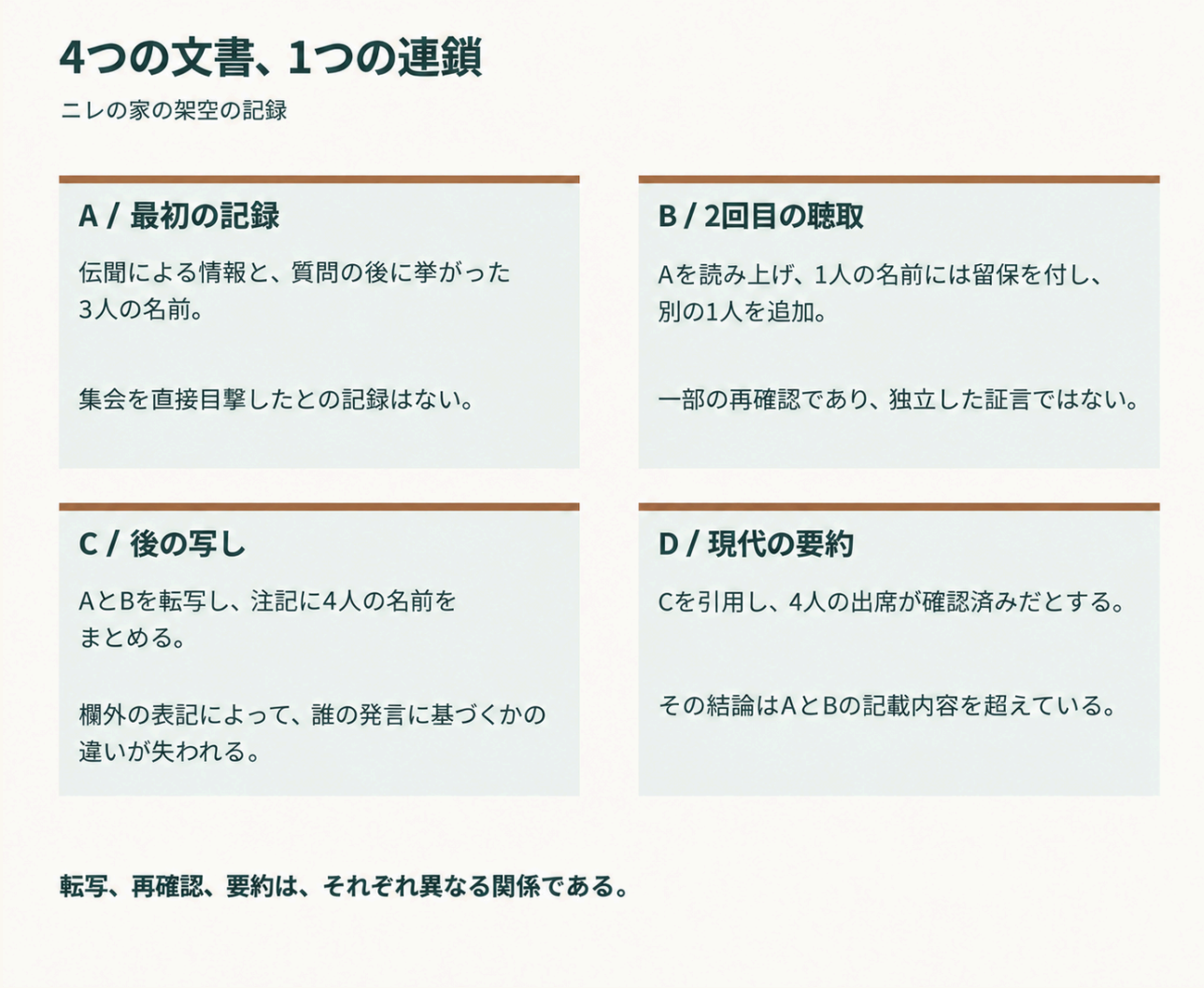


図23-1 — 原図の文字を日本語に置き換えた草稿です。図を選ぶと拡大して確認できます。

図は四つの架空の文書を示します。Aは聞いた情報を記録します。Bは留保付きで再確認し、名前を一つ加えます。Cは両方を写し、注の中で名前をまとめます。DはCを要約し、留保を失います。これらは依存関係であって、集まりについての四つの独立した観察ではありません。

10. 調査資料を段階的に解く

最初の判断は、分析単位を選ぶことです。第3の人物の出席を調べるなら、その人物に関するすべての記述を探し、確かさや留保の表し方を残してください。Aは、質問の後に作られた一覧にその人物を含めています。Bは明示的な留保を導入します。Cはラベルのもとに名前をまとめます。Dは、出席が確認されたと述べます。この連続は、伝承の中で不確かさが消える過程を示します。それだけで、資料の外におけるその人物の実際の状況を示すわけではありません。

第2の判断は、関係の種類を区別することです。AとBの間には、明示された読み聞かせと部分的な再確認があります。A・BとCの間には、明示された書写があります。CとDの間には、出版上の参照があります。これらの関係は架空の事例の中に裏付けがあります。一方、イネスが聞いた会話と集まりの関係は、仲介者が分からない帰属です。矢印には作業名を添える必要があります。そうしなければ、図が、実在しなかった直接観察の連鎖を示唆しかねません。

第3の判断は、留保と否定を混同しないことです。「出席を確言できなかった」は「不在を確言した」とは異なります。前者を後者に変えると、不確かさを否定的な主張に置き換えてしまいます。表では、出席するとされること、不在とされること、不確かであること、情報が残っていないことを別の分類にしてください。この選択は、後のすべての要約に影響し、空欄を証明済みの除外と読者が解釈することを防ぎます。

擁護できる記述

適切な記録は、例えば次のようになります。「第1の記録は、会話で得た情報をイネスに帰し、出席者についての質問後に三つの名前を記す。第2は、第3の名前について留保付きの再確認を記録し、話に出た人物として別の名前を加える。後世の写しとその現代の要約は、異なる位置付けの帰属を均一な一覧に変える。資料群は、集まりについての独立した観察を提供しない。」各文を文書に結び付けられ、何を結論しないかも明らかです。

不適切な記録は、「四つの文書が、四人の出席を確認する」となります。誤りは数だけにありません。媒体と独立性、聞いた情報と観察された出席、留保と確認、解説と供述を混同しています。訂正するには「おそらく」を加えるだけでは不十分です。その文が消した関係を再構成しなければなりません。正確さは、誤って構成された結論の前に慎重な語を置くことではなく、論拠の構造によって決まります。

次に何を探すか

次の探索は問いによります。集まりを調べるなら、場所、日付、参加者について、独立し、問いに関わる証拠を探します。手続を調べるなら、記録の基準と比較できる別の文書を探します。受容を調べるなら、変化を説明する中間の版や引用を探します。普遍的に最良の拡張はありません。新しい文書が特定された不確かさに答え、他との関係を記述できるとき、調査は進みます。

集まりに言及する同時代の書簡が現れても、すべてが自動的に解決するわけではありません。同じ噂に依存しないか、同じ集まりを指すか、どの参加を誰に帰しているかを確かめる必要があります。文書の種類が変わるだけでは、独立性は認められません。書簡、調書、年代記が同じ情報を再現することもあります。物理的な形や著者が違っても、つながりの分析は依然として必要です。

11. 手順を示した演習——過剰な主張を訂正する

第1の課題。次の架空の文を見直してください。「調書に暴力への言及がないので、イネスは圧力なしに話した。」含まれる二つの推論を指摘し、代わりの文を書いてください。解答を読む前に、文書の沈黙と条件についての積極的な記述を区別します。不在が情報として役立つには、資料群が何を残している必要があるかも問います。回答を記録するための調書は、その回の状況を十分詳しく記述しない場合があります。

理由を示した解答。この文は、言及がないことから暴力の不在を推論し、さらにその不在を完全な自由に変えています。証拠に見合う表現は、「参照した調書には暴力が記されていない。それだけでは供述のすべての条件を再構成できない」となります。訂正は観察を保ち、文書が支えない結論を除きます。先へ進むには、他の事例で記録された条件を自動的にイネスへ移さず、手続についての固有の情報を参照する必要があります。

第2の課題。学習者が「第4の名前の出現は、イネスがより多くの細部を思い出したことを示す」と書きました。資料群と矛盾しない二つの代替説明と、それらを区別できる観察を提案してください。目的は、すべてを疑うことではなく、同じ本文上の変化に複数の原因がありうると認識することです。他の説明では同じように説明できない証拠を示すと、説明は強くなります。

理由を示した解答。名前は、残っていない質問の後に現れたのかもしれず、イネス自身の補足だったのかもしれません。Aでは省いた情報をBが記録した可能性もあります。残された明示的な質問や、草稿との比較があれば、可能性を区別しやすくなります。現状の情報では、Bが「会話に出てきた人物」という特定の位置付けで名前を追加することだけを主張できます。それを観察された出席者に変えたり、出現に確実な心理的原因を与えたりしてはいけません。

第3の課題。Cの欄外注が、新しい版で題名として印刷されました。読解記録では何に注意を促すべきでしょうか。同じ言葉でも位置の変化が重要な理由を説明してください。その後、見出しをイネスに帰さずに情報を保つ、二文の編集注を書いてください。

理由を示した解答。題名は元来の構成の一部に見え、注より広い内容を覆う場合があります。適切な注は、「見出しは、後世の写しの書き込みを再現している。先の記録でイネスに帰された言葉の一部ではない」となります。解答は由来と射程を特定しています。書き込みの筆跡や年代を確定できない場合は、正確な著者を創作する代わりに、その限界を述べる必要があります。

第4の課題。質問が完全に残っていないため、証言全体を除くべきだと読者が提案しました。それでも可能な調査と、限界が残る調査を説明してください。確かな答えは、少なくとも二つの積極的な用途と一つの限界を挙げます。例えば、残された告発の構成と留保の編集上の変化は調べられますが、対話全体を逐語的には再構成できません。一つの側面が欠けても、他のすべてが壊れるわけではありません。

12. 自分で取り組む練習と解説付き解答

解答を見る前に解く練習

ノートに答えてください。各練習について、結論、それを支える証拠、限界を書きます。新しいページから始まる解答へ進む前に、このまとまりのすべての設問を終えてください。後で比較できるよう、最初の答えを残します。

練習1。別の架空の事例で、三つの出版物が古い版の同じ段落を引用しています。二つは同じ語を使い、第3は語彙を現代化しています。学生がそれらを三つの裏付けとして提示しました。最低限どのような図を作るべきでしょうか。答える前に、出版の歴史と語られた出来事の歴史を分けてください。現代化は独立しているような外観を生む場合がありますが、参照先を点検すると消えることがあります。

練習2。記録では、ある人が光を見たとされています。要約では、超自然的な姿を見たとあります。何が変わったでしょうか。「誇張された」だけでは不十分です。変化の正確な段階を特定し、新しい記述を支えるにはどの情報が必要かを説明してください。違いは、知覚された対象、観察者の解釈、同定を述べる声のいずれにも関わりえます。

練習3。定型表現では、本人が「前の内容」を確認したとありますが、その文の前に写しの欠落があります。何を確認したかを述べられるでしょうか。関係をどう記録するか、明確な本文上の参照と、物理的に失われた内容の違いを説明してください。

練習4。二つの文書が参加者の数で食い違います。一方は古く、他方は長いものです。どちらを選びますか。古さや長さの普遍的な規則を使わずに答えてください。目的、依存関係、完全性、語られた情報との関係を考慮します。

練習5。記録、出版、研究を区別したガウディについての文を書いてください。

理由を示した解答を見る

答えを見直すための解答と解説

練習を解いた後に参照してください。番号は前の設問の順序に対応します。自分の答えの理由と解説の理由を比べてください。文言をそのまま繰り返す必要はありません。

練習1の解答

共通の版を特定し、各出版物からの既知の参照をたどります。三つが同じ段落に依存するなら、共有する基盤の三つの受容があります。出来事についての三つの独立した観察ではありません。現代化は、特に確かさや可能性の表現、主体を変える場合、解釈上の関与として分析に値します。正しい記述は、ある読みの広まりに言及できますが、それを外部の裏付けに変えることはできません。

練習2の解答

要約は、知覚の記述を、その原因や指示対象の同定に置き換えています。正当化するには、誰が提案したかを保ちながら、記録内の明示的な帰属や独立した論拠を見つける必要があります。調書が光にしか言及しないなら、記録票で意味を補ってはいけません。要約が曖昧な観察を明確な場面へどう変えたかは調べられます。その変化は受容の事実であって、出来事の新しい証拠ではありません。

練習3の解答

確認の存在と以前の内容への参照は記録できますが、確認された対象が欠けているなら、全体を再構成できません。表では、参照は残ることと、範囲が不完全であることを示します。別の写しを探すことが役立つかもしれません。最も論理的に見える一節で欠落を埋めれば、仮説を本文に変えてしまいます。再構成を提案する場合は、転記へ黙って組み込まず、別に示して根拠を説明する必要があります。

練習4の解答

どちらの性質だけでも決まりません。早い時期の短い本文は要約かもしれず、後世の長い本文は異なる資料を残すか、解釈を加えているかもしれません。調査ではそれらの関係を特定する必要があります。できなければ、食い違いを残し、結論を限定します。都合で一つの版を選ぶと、人為的な整合性を作り、他者が見直すべき問題そのものを隠してしまいます。

練習5の解答

一つの解答は、「1662年にガウディに関連付けられた供述は、資料と出版の伝承を通して研究され、その中では記録、ピトケアンの出版物、現代の解釈を区別する必要がある」です。具体的な仕事では、実際に参照した文献を加えると改善できます。確認していない葉番号や頁を創作してはいけません。

13. 課題——自白と読解の調査資料

最終成果物は、一つの供述、または範囲を限定した断片の詳しい記録です。媒体を特定できる、適法で十分なアクセスを選んでください。講座の文書でも、読解の水準に合う公開資料でも構いません。目を引く事例を探す必要はありません。質問、定型表現、異同を含む短い一節のほうが、文脈のない長い語りより分析の可能性を提供することがあります。質は、判断の正確さと追跡可能性によって決まります。

まず、供述を帰される人物、記録の年代、記載がある場合の場所、判明している場合の作成機関、使用した版や複製を特定します。これらを、語られた出来事の年代と区別してください。画像、転記、翻訳、二次的な引用のどれで接したかの注記を加えます。この初期記録によって、実際にはなかったかもしれない原本への接触を、読者が作業に帰することを防げます。

課題の本体は四つの部分で構成します。第1に、帰属と確かさ・可能性などを保つ短い言い換え。第2に、所在を示した例を含む、声と作業の表。第3に、参照した資料間の依存関係の図。第4に、具体的な問いに答え、先へ進むために不足する情報を示す結論です。翻訳を含める場合は、論拠に影響する判断を説明し、自分の解説と訳した言葉を分けてください。

見直しの基準

基準	確かな作業	見直しが必要な兆候
特定	出来事、記録、版を区別する	すべての層に一つの年代を使う
帰属	誰が言い、聞き、解釈するかを保つ	噂を観察に変える
依存関係	文書間の関係を説明する	写しを新しい証人として数える
条件	証拠、仮説、沈黙を区別する	裏付けなしに自由や特定の強制を主張する
結論	証拠に見合う範囲で答える	記録のない結末や体験を加える

まず、論拠を変える誤りを見直してください。不完全な参照情報は訂正できますが、編集者の分類を本人に帰すなら、解釈をやり直す必要があります。帰属の問題を、長い参考文献一覧で補おうとしてはいけません。各参考文献は役割をもち、使う論点を正確に支える必要があります。何を加える資料なのか分からなければ、一覧を増やす前に問いへ戻ってください。

課題の締めくくりに、短い反対の立場からの検討を加えます。注意深い人が出せる最も強い異議を述べてください。未解決の依存関係、間接的なアクセス、別の解釈を指摘してもよいでしょう。利用できる情報で答え、未解決の点を認めます。この練習は仕事を弱めません。具体的な代替案にさらされなかったために強く見える結論と、批判に耐える結論を区別できます。

14. 用語集と記述上の判断

調書。識別可能な慣行によって、ある手続上の行為を記録する文書です。その形式が情報を選択し、配列することがあります。逐語的な対話として使う前に、何を残そうとし、働き掛け、回答、終結をどう提示するかを検討してください。この語だけで、各箇所の詳しさや忠実さが決まるわけではありません。

自白。特定の枠組みで、一定の事実や責任の承認として提示される供述です。手続上の分類の場合も、編集者による特徴付けの場合もあります。その語の存在は、各内容の歴史的な真実や記録の条件を解決しません。誰が、どの範囲で使うかを特定してください。

再確認。以前の内容を確認する作業です。分析には、その内容、確認に伴う留保、記録のされ方を特定する必要があります。再確認は、自動的に独立した観察にはなりません。手続の一段階の継続、変更、終結を示すことがあります。

仲介。質問、記録、書写、編集、翻訳、解説など、情報の作成、保存、伝達を可能にする関与です。偽造とは異なります。その研究は、可能な変化と確認できる変化を示します。仲介された資料も資料であることに変わりはありません。変わるのはアクセスの種類と、それによって答えられる問いです。

モダリティ。文が確実性、疑い、可能性、義務、帰属を表す仕方です。「見た」「見たと思う」「人が言うのを聞いた」は、互いに置き換えられる文体上の異形ではありません。保つことで、証言の位置付けを変えずに済みます。要約では特に動詞と留保を点検してください。名前や年代より先に消えがちだからです。

独立性。裏付けようとする主張について、関係する依存がないことです。著者が異なることで与えられる絶対的な性質ではありません。二つの本文が、一部の問いでは独立し、別の問いでは同じ情報を共有する場合があります。特定の内容と伝承関係について、独立性を論証する必要があります。

資料の沈黙。参照した資料に、ある情報がないことです。その強さは、文書が何を記録すると期待できるか、アクセスが完全かによります。探索を導く場合はありますが、歴史上の不在を常に主張できるわけではありません。断片、版、事件資料、検討した資料群という観察の範囲を記してください。

裏付け。問いに関わる証拠によって、主張に追加の支持を与えることです。整合性、依存関係、射程の検討が必要です。語の一致は、確認ではなく書写を示すかもしれません。独立した資料も、主張の一部だけを支える場合があります。どの点が強まり、どの点が未証明かを説明してください。

複雑さを保つ表現

文書がある行為を本人に帰し、別の経路で行為を確定していないなら、「記録では本人の行為とされる」と書きます。定型表現を見つけたら、「調書は供述を〜と特徴付ける」と書き、その特徴付けの意味を調べます。研究が説明を提案するなら、提案者の名前を挙げます。これらは慎重さの儀式ではありません。主張の責任を適切に割り当てる表現です。

質問が欠けていれば、言葉を創作せずに、移行と仮説を記述します。異同が情報を加えるなら、原因を説明する前に変化を名指します。結末が分からなければ、資料群と検索を限定します。語りが非日常的なら、その文化的な関心を保ち、物語の強さを確認に変えないようにします。こうして記述はより正確になり、調査を続けたい人にも、より有用になります。

15. 参照：主張を分け、根拠を示す

レッスン5から応用したこれらの手法によって、自白についての文を公開前に見直せます。「自由に供述し、事実を確認した」に適用し、条件、内容、裏付けを分けてください。手引きやノートの例は、方法を比べるための架空のものです。ガウディについての事実を加えるのではなく、同じ資料が文の一部を支え、他の部分を未解決のままにする仕方を示します。

段落を見直すとき、参考文献と「同じ話題を扱っているか」だけを問わないでください。二つの文章が同じ都市、人物、伝統を扱っていても、同じ主張を裏付けるとは限りません。文を、特定できる箇所を用いて答えられるほど具体的な問いに変えたとき、検証が始まります。

次の架空の文を考えましょう。「1860年の手引書は、秘儀を授けられた人々が全員、家を守るためにその記号を使っていたことを証明する」。少なくとも文献の特定、年代、集団、頻度、行動、目的が含まれています。手引書に記号の図があるだけで確かめられるのは、その一部です。それによって残りの五つも自動的に正しくなるわけではありません。

文を分解してみます。特定可能な手引書がある。その一冊は1860年と年代付けされている。記号を含む。家庭での使用を指示する。対象読者は秘儀を授けられた人々である。その全員が使っていた。後半の主張には、それぞれ異なる証拠が必要です。手引書が使用を命じていても、誰かが実際に指示に従ったかは、なお調べる必要があります。

命題とは、個別に評価できる主張です。すべての文章を論理式の一覧にする必要はありません。分解は見直しのための道具です。いったん文を開いて各部分を確認し、その後、明瞭な文に書き直します。「常に」「すべて」「起源となる」「証明する」「連続性」といった語が現れるとき、とくに役立ちます。

同じではない三つの問い

「この資料は存在するか」は文献情報の確認です。「そのデータが含まれているか」は資料への帰属の確認です。「そのデータは自分の結論を裏付けるか」は論証の確認です。第一の問いを満たしても第二の答えにはならず、両方を満たしても第三の答えにはなりません。非の打ちどころのない参考文献一覧が、誤った推論に添えられることもあります。

文の対象範囲も重要です。「この一冊には図がある」は一つの物を指します。「この版には図がある」は、同じ版にも異なる状態のものがあり得るのに、そのすべての本に言及しています。「この伝統ではその図が使われた」は、実践、場所、人々にまで範囲を広げます。広げるたびに、新たな裏付けが必要になります。

見直しでは動詞に下線を引き、数量を表す語を丸で囲みます。動詞は、言及する、帰属させる、命じる、実行する、伝える、由来するといった、主張している関係を示します。数量表現は、一つ、いくつか、大半、すべてなど、何例を含むかを示します。「指示している」を「実践されていたことを証明する」に、「一つの記録」を「その伝統」に置き換えるとき、誇張が生まれやすくなります。

文の部分	検証できる問い	探すべき証拠
1860年の手引書	どの一冊を指し、いつのものとされているか。	資料の特定と年代付けの根拠。
その記号を含む	どこにあるか。	文脈を伴うページまたは葉。
家を守るため	その箇所にそう書かれているか。	本文に帰属する説明。
秘儀を授けられた人々	その集団をどう特定しているか。	呼称と対象読者。
全員が使っていた	その頻度はどう分かるか。	使用の証拠と標本の範囲。

各行に別々の文献が必要という意味ではありません。一つの資料が複数の命題を裏付けることもあります。大切なのは、それぞれに見分けられる裏付けがあり、ほかの命題の確かさがそのまま移されないことです。年代が確かで使用が不確かな場合、その違いを文章に残す必要があります。

確認のために立ち止まりましょう。記号と家庭での使用指示が載った一ページで示せることだけを残し、手引書についての文を書き直してください。「参照した一冊は、住居を守るためにその記号を使うよう指示している」で十分です。年代は根拠を確認してから加えます。実際の実践とその頻度は、未解決の問いとして残ります。

結論には橋渡しとなる理由、つまりそのデータが結論を支持する理由が必要です。ノートに処方を見つけたなら、証拠はそこに処方が存在することです。所有者が実行したと結論するには、「実行した行為だけを書き写していた」という前提を加えなければなりません。その前提は誤りかもしれません。読んだもの、依頼されたもの、興味を引いたものを集めていた可能性もあります。

つなぐ理由を明らかにしても、研究は弱くなりません。検証可能になります。仮に三つの文を書いてください。「これを観察する」「この理由でそれと関連付ける」「したがって、この範囲内でこの結論を主張する」。その後、自然な文章にまとめます。定型句を繰り返すより、論証を明瞭にすることが重要です。

架空の事例として、ノートの処方に「昨日試した。結果は違っていた」という余白の書き込みがあるとします。その筆者と年代が適切に関連付けられるなら、試みがあったことを示す証拠は強まります。ただし、処方に効果があったことも、共同体全体が実践していたことも示しません。論証は、正確な結論に届く必要がありますが、それを超えて伸ばしてはいけません。

別の書き込み、「効くと言われている」を考えましょう。これは、効果があるとされていたことと、間接的な伝聞を記録します。個人的な観察とは同じではありません。要約から「と言われている」を除くと、証拠の種類が変わります。誰の言葉かを示す動詞、否定、留保は、本質的な情報であり、省いてよい飾りではありません。

別の説明を検討する

ほかにどんな状況が同じデータを生むかを問いましょう。二冊の本が画像を共有する場合、直接の複製、共通の資料、間に入った再版、慣用的な構図が考えられます。どれもデータと矛盾しないなら、類似だけでは何が起きたか決まりません。次に、その可能性を区別できる特徴を探します。

考え得るすべての可能性を排除する必要はありません。文脈と証拠に適合する、関係のある代替説明に目を向ける必要があります。追加の前提が多い説明は、別の説明より説得力が低いかもしれません。ただし、最初の期待に合う物語を選ぶのではなく、その前提が何かを示さなければなりません。

結論が誤りでも何が起こるかを問うこともできます。実践が実行されなくても同じ文献が存在し得るなら、その存在は実行の証明にはなりません。一方で、背景、語彙、指示されたモデルを提供することはあります。この具体的な価値を見定めれば、すべての問いに答えないという理由で資料を捨てずに済みます。

> **見直しの道具。** データの所在を示し、つなぐ理由を述べ、結論の範囲を定めます。どれか一つが欠けていれば、まだ検討可能な論証にはなっていません。

「これはすでに分かっていたことを確認する」とだけ述べ、何を確認するかを示さない文には注意が必要です。名前の存在を確認しても、その解釈は確認しないかもしれません。流通の年代を支持しても、成立年代は支持しないかもしれません。「これ」を具体的なデータに、「こと」を具体的な命題に置き換えましょう。

16. 参照：知覚、記憶、語り

この節は、観察、記憶、伝え聞いた情報の違いを保つためにレッスン5を応用しています。自白では、人物と語られた内容を結ぶ動詞に特に注意してください。書簡や聞き取りの例を使って、司法資料の外でも練習できます。その後イネスに戻り、聞いた情報が出席者の一覧に変わったとき、何が変わったかを確かめてください。

語りは透明な窓ではない

証言は、特定の立場にいる人を通じて情報を伝えます。その人は言葉を選び、後の時点から思い出し、ある相手に向けて語ります。この仲介を認めても、語りが無用になるわけではありません。何を観察し、何を解釈し、何をほかの人から知ったのかを問えるようになります。一つの発言に三つとも含まれることがあります。

架空の手紙を考えましょう。「昨夜、広間で光を見た。女きょうだいは、祖父が予告したしるしだと言った。全員が確信した」。第一の文は視覚体験を述べます。第二は女きょうだいに帰属する解釈と家族内の伝承を伝えます。第三は集団の心の状態を一般化します。それぞれ異なる確認が必要です。

光を調べるなら、観察条件、持続時間、考えられる説明が必要です。家族の解釈を調べるなら、手紙にはすでに重要な帰属情報があります。全員が確信したと主張するには、誰がいて、どう立場を表したかのデータが必要です。一人の語り手がほかの全員の心を当然に知っているとみなしてはいけません。

証言は誠実でも、何を見たかの同定を誤っていることがあります。また、観察を正しく述べながら、原因の説明には十分な根拠がないこともあります。誠実さ、知覚の正確さ、因果説明の正しさは別々の側面です。証人がうそをついているかだけを問う議論は、歴史的な問題の多くを検討せずに残します。

時間的な隔たりと記憶の変化

語った日付が重要なのは、記憶が後の状況から言葉にされるためです。人は、後から知ったことに基づいて出来事を組み直すことがあります。遅い時期の記憶がすべて虚偽だという意味ではありません。出来事の日付、現存する最初の記録の日付、参照する版の日付を分ける必要があるということです。

架空の事例です。1910年の自伝が1870年の会合を描きます。1871年の手紙は、その会合に、より少ない詳細で触れています。自伝には、手紙にない対話と名前が加わっています。手紙にないからといって創作だとは証明されませんが、手紙が出来事に近い時期のものだからといって、詳しい版全体が確認されるわけでもありません。

役割を比較します。手紙は旅行を知らせるため、自伝は個人の改宗の物語を組み立てるために書かれたのかもしれません。ジャンルの違いは選択と強調を説明し得ます。その後、どの詳細に追加の裏付けがあるかを調べます。一方が完全に真実で、もう一方が完全に虚偽でなければならない競争にしないでく

ださい。

現存する最初の版は有用な基準ですが、存在した最初の版とは限りません。「この資料一式で見つかった最も早い記録」と言えば、行った作業の範囲に結論を限れます。「この物語は1910年に生まれた」とするには、それ以前に流通していなかったと示す必要があり、ずっと難しい主張です。

質問、聞き取り、誘導される回答

回答は質問の仕方に左右されることがあります。「何が起きましたか」と「その姿はいつ現れましたか」では、開かれる範囲が違います。後者は出現を前提とします。回答だけを残すと、それを生んだ文脈の一部を失います。聞き取りの資料では、入手できるなら質問と条件も記録します。

すべての聞き手に操作の意図を想定する必要はありません。善意であっても、質問は会話を方向付けます。聞き手が持ち込んだ分類と、話し手が自発的に使った分類を見分けることが課題です。多様な語彙で解釈される体験を研究するとき、とくに役立ちます。

架空の例で、三つの聞き取りに「入門儀礼」という語があるものの、いずれも最初に出たのは質問だったとします。その一致だけでは、三人が聞き取り前から体験をそう呼んでいたとは示せません。語の受け入れ、やり取りへの適応、すでに定着した用法のいずれかを記録している可能性があります。何を主張できるかを決めるには、文脈を調べます。

聞き取りを引用するときは、録音・録画、確認済みの書き起こし、要約、公刊された抜粋のどれを使うかを特定します。それぞれ残る情報が異なります。要約ではためらいや言い換えが省かれることがあります。聞き取りの編集も、写本の編集と同様に、仲介の一つです。

互いに依存する証言

二人が話し合った後に、同じ出来事について語ることがあります。それぞれ別の文献ではありますが、一致の一部はその会話に由来するかもしれません。独立性を調べるには、人名を数えるのではなく関係を研究します。後からの一致は、同じ詳細についての二つの別々の観察ではなく、共有された記憶の証拠かもしれません。

架空の演習で、エレナは会合当夜にメモを書きます。数週間後、ダニエルはそれを読んでから自分の記憶を書きます。二人は同じ句を記しています。会合で何が言われたかを調べるには、依存を考慮します。集団がどう一つの語りを固めたかを調べるなら、メモの流通が中心的な証拠になります。

不一致も、常に決定的な誤りとは限りません。違う場所にいた二人は、違う面を観察できます。一人は始まりを覚え、もう一人は遅れて来たかもしれません。比較では、あらゆる差を欠点とするのではなく、同じ点について実際に両立しない内容を探します。観察できる立場になかったことを、裏付けとして資料に要求してはいけません。

証言に見合った結論

適切な記述例です。「手紙は、書き手自身が光を観察したと述べ、女きょうだいの解釈を記録する。その場の全員が確信したという結論は語り手に属し、ここには個別の証言による裏付けがない」。この文は、語られた体験、解釈の帰属、限界を保ち、資料一式では解決できない問題について判断を下しません。

信念を研究するなら、解釈がどう使われ、どんな語彙を用い、どんな社会関係を表すかを分析できます。語りの歴史的重要性を認めるために、超自然的原因を証明する必要はありません。同時に、語り手の説明を外部の事実として示してもいけません。誰がそう解釈したかを正確に記述すること自体が、学術的成果です。

17. 参照：沈黙と情報の状態

ここでは、レッスン5と17の手法を組み合わせ、省略を読み、不確かさを記録します。残っていない質問、読めない回答、明示的な否定には、異なる欄が必要です。この区別を、供述の条件と司法上の結末に適用してください。他の事例でよく起きることによって欄を埋めず、一般的な文脈と個人の情報の違いを保ちます。

「出てこない」には、どこに、どの形で、どのように探した後なのかという補足が必要です。一ページで名前が見つからないことと、作品全体で見つからないことは同じではありません。自動検索で見つからないことも、綴りに異形のある写本に存在しないと示すこととは違います。

まず三つの状況を区別します。第一に、文献全体を調べたが、その情報がない。第二に、断片しか利用できない。第三に、本文は存在するが、ページの欠落、読めない画像、文字を認識しない検索などによってアクセスが不十分である。状況ごとに、使える表現は異なります。

不在が証拠として持つ強さは、そこにあるはずだと期待できる程度に左右されます。部屋のすべての本を記録すると明記する目録なら、載っていない書名について重要な情報を提供するかもしれません。別の用件を扱う手紙での不在は、それほど多くを語りません。沈黙から論じる前に、なぜその情報を期待するのかを説明します。

二つの架空の例を考えましょう。会合の完全な出席者一覧にはマリナがいない。同じ会合の装飾についての記事にも、彼女は登場しない。この二つの不在は同じ価値を持ちません。一覧は参加者を列挙するものですが、記事は全員を省くこともできます。ジャンルと目的が期待を変えます。

一覧にも確認が必要です。完全か。未登録の訪問者は含まれるか。行事の前と後のどちらに作られたか。マリナは別名で出ていないか。目的は、どんな不在にも言い訳を作ることではありません。不在を手掛かりにできる条件を特定し、その条件が満たされない場合を見分けることです。

架空の練習では、個別の奉献文は、その都市のあらゆる時代に崇敬されたすべての存在の一覧にはなりません。「その名はここにない」から、「そこでその信仰が存在したことは一度もない」とは導けません。普遍的な結論は、観察の時間的・資料上の範囲を超えます。自白に名前がない場合も同じです。まず、何を記録しようとし、資料群のどの部分が残っているかを検討する必要があります。

見つからなかった検索を記録する

調べた資料群、その限界、手順を書きます。架空の例なら、「デジタル化された一冊の1〜32ページを調べた。33、34ページは欠けている。利用可能な部分では、その語は見つからなかった」とします。この文があれば、別の人は作業を一から再現しなくても探索を広げられます。

自動認識された本文では、異なる綴りを検索し、関連する画像を確認します。文字の誤認識、行末のハイフン、歴史的な綴りは、実在する語を見つからないと判定させます。コンピューター検索の結果がまず示すのは、検索という操作の結果です。文献についての主張に変えるには、その限界を点検する必要があります。

状況	範囲に見合った表現	避けるべき言い過ぎ
文献全体を確認済み	この文献では言及されない。	一度も存在しなかった。
断片が現存する	利用可能な断片には出てこない。	作品全体にもなかった。
照合していない自動検索	検索では一致が得られなかった。	写本にその名は含まれない。
網羅を意図した記録	記録が完全なら、不在は重要になる。	記載の欠如だけで不存在が証明される。

不在は、ほかの手掛かりとともに結論を支えることがあります。沈黙から推論してはいけないわけではありません。期待を正当化し、資料群の範囲を定め、保存上の問題を考える必要があります。関連する複数の確認が同じ方向を示すほど結論は強くなります。「出てこない」を強調して繰り返しても、強くはなりません。

空欄は、不明な情報、まだ入力されていないデータ、その記録には当てはまらない問いを意味する場合があります。直感で意味を選ばないでください。表を分析する前に、作成者の規約を参照します。自分の調査資料では、情報不足、記録された否定、非該当の欄を明確に区別してください。その違いが結果の解釈を守ります。

この規約は計算を変えます。職業欄が空でも、その人物を無職に分類してはいけません。指標に印がなくても、その出来事がなかったと自動的に結論することはできません。フィールドの定義と記録の種類を読む必要があります。二値に見える欄の背後には、証拠の存在を知っているのか、証拠を持っていないのか、という認識上の区別が隠れているかもしれません。必ずしも、出来事が起きたか、起きなかったかという対立ではありません。

概念上の4つの状態

違いを学ぶため、居住地の架空例を使います。「居住地判明」には場所が入ります。「居住地不明」は情報の不足を示します。「非該当」は、その欄が意味を持つ人物を記録が表していないことを示すでしょう。「記録された否定」には、ある候補地にその人物は住んでいなかったというような、明示的な主張が必要です。表の場所を取らないからという理由で、これらを一緒にしてはいけません。

状態	言えること	言えないこと
既知のデータ	記録された情報がある	それが完全で誤りがない
不明	その欄に十分なデータがない	出来事が存在しなかった
非該当	問いがその単位には当てはまらない	否定の回答である
記録された否定	史料が特定の主張を否定している	すべての代替案が解決済みである

この表は考え方のモデルであり、すべてのプロジェクトがまったく同じ4つのラベルを使うという主張ではありません。表現方法は各プロジェクトの説明資料によって決まります。データを書き出し、空欄を言葉で置き換えるときは、元の意味を保ってください。計算を楽にするために、すべての状態を黙ってゼロに変えてはいけません。その便利さが、最初の計算をする前から歴史上の問いを変えてしまうかもしれません。

誤りと修正の例

架空のデータ集合には100件の記録があり、職業が特定されているのは30件だけです。その30件のうち12件は繊維関係の仕事に言及しています。既知の職業の中の割合として、12を30で割れます。また、100件のうち12件にその言及があるとも言えます。残る88人はその分野で働いていなかった、とは言えません。70人は職業不明で、18人は別の分類です。異なる集団なのです。

修正には、繊維関係の仕事への言及、ほかの既知の職業、不明な職業という3つの数を示します。そのうえで、使用する割合の分母を定義してください。第3の集団を隠すグラフは、全体を網羅しているように見せるかもしれません。その分布が、情報のある部分集合を記述していることを、明確な注記で説明する必要があります。データの欠如は最後に取り除く厄介物ではなく、結果の解釈の一部です。

比較を止めるべきとき

2地域で情報が判明している割合が大きく異なると、分類の直接比較は誤解を招くことがあります。社会的な違いを説明する前に、資料のカバー範囲を比較してください。一方の地域の史料は職業を記録し、他方はほとんど記録しないのかもしれません。この可能性は、すべての違いが資料によることを証明しませんが、検討を必要とします。責任ある結論は、観察されたパターンと、それを生んだかもしれない条件を区別します。

18. 参照：人物、供述の回、文書

レッスン17のこの応用は、資料点数が人数や確認の回数に変わることを防ぎます。歴史上の事例の四つの供述について、人物、回、出版上の伝本を別々の識別子で管理してください。数は異なる問いに答えます。以下の演習では、架空の例を用い、一人の生涯が、歴史上の人数を増やすことなく多数の行を生む仕組みを示します。

人物は伝記上の実体です。事例は告発の経緯を整理し、手続は措置の経過を記述し、文書はその経緯の一部に関する情報を保存します。これらの単位は関連しますが、同等のものとして数えることはできません。1人の人物が複数の措置に結び付き、各措置から複数の文書が生じる場合があります。関係を管理せずに表を結合すると、1人の伝記が多数の行に変わることがあります。

自分の調査資料では、供述の回、手続上の行為、手続全体を分けて定義するとよいでしょう。行われた可能性が高そうだというだけで行為を記録してはいけません。どのように文書を一つの事例にまとめ、どの証拠で関連付けるかを説明します。モデルを日常語の自動的な置き換えにしてはいけません。その用語には、別の人が同じ資料に適用できる定義が必要です。

一通りの例

架空の人物Elspeth Aを想像してください。事例資料には、告発書、許可書、2件の司法上の措置、後年の覚え書きが残っています。人物は1人、学習用の事例は1件、措置は2件、文書は5点です。文書1点につき1行の表で5行を5人と数えれば、人数を5倍にしてしまいます。書き出したデータが各措置の横に伝記情報を繰り返している場合、行数を事例数として数えることも誤りになります。

解決策は、重複した行を自動的に削除することではありません。それらは異なる出来事を表し、必要な情報を残しているかもしれません。分析の水準を選ぶ必要があります。人物を数えるなら、人物の識別子を使用し、一意性を確認します。措置を研究するなら、それぞれ固有の識別子を保持します。資料の状態を評価するなら、明示した基準で文書を数えます。同じデータベースから複数の正しい総数が得られるのは、異なる問いに答えているからです。結果の名称と数えた単位が一致しないときに誤りが生じます。

問い	適切な単位	よくある危険
何人の人物が登場するか	人物の同定単位	文書を人物の伝記として数える
いくつの措置が記録されているか	定義された措置	複数の措置を1つに減らす
どの史料が事例を支えるか	文書の参照情報	言及と文書を混同する
いくつの告発の経緯が整理されているか	プロジェクトが定める事例	異なる定義を押し付ける

識別子と名前

識別子によって、表示名に依存せず記録を参照できます。2人が同名であったり、1人が異なる表記で登場したりすることがあります。そのため、画面上の文字列でまとめるだけでは十分ではありません。識別子そのものも、歴史上の同定が完全であることを保証しません。それは、新しい証拠が現れれば見直されうる、プロジェクトの判断を表します。技術上の有用性と、同定を研究によって検討できるという性質の両方を保ってください。

架空の例です。ある人が同じ調査の二回の場で供述します。資料群の継続性によって一つにまとめられますが、各回は固有の年代と内容を保ちます。行為が複数あるからといって、人物を増やしたり、語られた出来事を増幅したりする必要はありません。数える前に、どの関係を表し、どの証拠で支えるかを説明してください。

割合を計算する前の確認

関係する各水準について、異なる識別子の総数を書いてください。次に、それらの数が異なりうる理由を説明します。できなければ、書き出したデータや検索条件を見直してください。この確認は、後でグラフになると見つけにくくなる誤りを防ぎます。見た目に説得力のある結果の背後に、行の増殖が隠れていることがあります。追跡可能性は、色やタイトルを選ぶずっと前、記録の水準から始まります。

19. 参照：保存と代表性

レッスン17は、ここで規模を確認する方法を提供します。長い自白は多くの細部を調べられますが、その豊かさによって、告発された全員を代表する標本になるわけではありません。モチーフや結末を比較する前に、どの文書が残りえたか、各プロジェクトがどの欄を記録したかを見直してください。数値の例は架空で、資料がカバーする範囲と歴史上の頻度を区別するためのものです。

情報の欠如は、必ずしも無作為に分布しません。ある種類の裁判所は、別の種類より多くの資料を残すかもしれません。ある時期は、よりよく保存されているかもしれません。例外的な事例は多くの文書を生み、編集・刊行の際にも注目されやすいかもしれません。これらは、既知の記録と歴史上の母集団との関係に影響します。データ不足を認めるだけでは足りません。ある記録が残り、別の記録が残らないことを促した条件を問う必要があります。

数量と代表性の区別が決定的です。大きな部分集合でも、選択が特定の側面と関係していれば、その側面を適切に代表しない場合があります。逆に、小さな集合でも、迫害全体を代表せずに、具体的な手続について貴重な情報を提供できます。問いはカバー範囲に合わせる必要があります。「事例が多い」ことを、どんな割合も歴史上の全体を記述するという保証にしないでください。規模は不均等な選択を自動的には補正しません。

条件を確認した比較

それぞれ100人が記録された架空の2地域を考えます。地域Aでは結末が20人分判明し、そのうち10人が処刑されています。地域Bでは80人分が判明し、40人が処刑されています。既知の結末の中では両方とも50パーセントです。全記録を分母にすると、記録された処刑はAで10パーセント、Bで40パーセントです。後者の差は、歴史上の結末に同等の差があることではなく、カバー範囲を反映する可能性があります。

両地域の実際の割合がまったく同じだったとも結論できません。示したのは、利用可能な情報から、対照の一部を資料の条件で説明できる余地があるということだけです。先へ進むには、結末がどのように保存され、各部分集合にどの種類の事例があるかを研究する必要があります。この課題が教えるのは、記録の差が自動的に現象の差へ変わることはない、という具体的な注意です。偏りを疑っただけで、その差が自動的に消えるわけでもありません。

データ不足を記述する

問いに応じて、時期、地域、史料の種類別にカバー範囲の表を作ります。情報のある記録数と、ない記録数を示してください。主要な特徴を調べる前に、割合を比較します。この表は結果のグラフより地味かもしれませんが、その条件を伝えます。ある分類が詳細な事例資料にしか現れないなら、検索は研究主題だけでなく、資料の豊富さも選んでいる可能性を認める必要があります。

出来事について分からないことと、コード化について分からないことも区別するとよいでしょう。欄が空なのは、資料に情報がないからかもしれず、プロジェクトが体系的に収集しなかったからかもしれません。設計上の判断に由来するものを、文書資料の側に帰してはいけません。記録の指示と、チームが均等に使わなかった欄を点検してください。列の存在は、数量比較を支えられることを保証しません。

補正できないときにすること

欠けている情報量を推定したり、その分布を再構成したりできるとは限りません。その場合、結論を観察した資料集合に限定し、問題を説明します。保存についての仮説を立て、その評価に役立つ文書を示すことはできます。一見決定的な数値を出すために、補正の重みを作り上げてはいけません。調整には前提と証拠が必要です。根拠なく適用すれば、除こうとした誤りより大きな誤りを持ち込むかもしれません。

役立つ表現は、「この分布は情報が利用できる記録を記述する。地域によってカバー範囲が異なり、そのまま外挿することはできない」です。対応する数量をこの文に添える必要があります。そうすれば限界は、最後に貼り付けた一般的な注意ではなく、結果の具体的な性質として機能します。読み手は何を使え、どの比較に追加作業が必要かを理解できます。

20. 参照：研究を読み、人物を見失わない

この締めくくりは、レッスン5と17を応用しています。自白の専門的な解釈を読む際に使ってください。問い、資料群、手順、結論を特定し、その後で人物の表し方を確認します。影響力のある説明にも、誰の説明かの明示と証拠が必要です。十分なアクセスのない言語上・資料上の問題を解決したふりをせずに、論争をまとめることができます。

学術論文は、そのまま写せる事実の箱ではありません。問題を選び、資料を提示し、答えを論じる発言です。有効に使うには、その構造を理解する必要があります。要旨だけで話題は分かっても、専門的な提案を評価するには通常不十分です。要旨は予告し、本文は著者が結論を妥当と考える理由を示します。

問い、資料群、手順、結果の四つを分けます。問いは知りたいことの範囲、資料群は調べた文献、手順は比較や解釈の方法、結果は著者が確立したと考える内容です。混ぜると、未解決の問いを答えとして引用したり、作業仮説を発見に変えたりします。

論証の骨組みを取り出す

架空の論文が、手引書の五つの写しを調べ、二つが同じ系統に属すると提案するとします。問いは伝承関係、資料群はその五つ、手順は異読の比較、結果は理由を示した分類です。すべての読者や実践を調べたとは限りません。写しについて妥当な結論が、そのまま共同体にも及ぶわけではありません。

論証を三行にします。「著者は…を観察する」「その観察は…を示すと考える」「そのため…を提案する」。この小さな図式で、より注意して読むべき場所が見えます。第二行が書けなければ、つなぐ理由をまだ理解していません。結果だけ写しても、なぜ説得的か、議論の余地があるかを説明できません。

次に、論文がほかの研究から得たものと、自ら加えたものを分けます。年代は古い目録から、翻刻は既存の版から来て、比較は独自かもしれません。論証を記述する際に読んだ論文を引用するのは正当ですが、別の出所のデータを伝えるだけなら、独立した物質的調査として示すべきではありません。

専門家の見解が異なるとき

立場を選ぶ前に、実際に同じ問いに答えているかを確かめます。一人は特定箇所での名前の意味を、もう一人は数世紀にわたる歴史を調べているかもしれません。異なる答えが必ず矛盾するとは限りません。資料群が違い、「起源」「使用」「伝統」の定義が異なることもあります。

実際に見解が分かれるなら、分岐点を探します。一文字の読みか。年代か。類似に与える重みか。両立しない説明モデルか。そうすれば、「意見はいろいろある」ではなく、「違いは、この特徴の同定と、どの類例を適切とみなすかに依存する」と、情報のある比較が書けます。

論証同士の関係が分からないまま、両側の著者数で専門的な論争を決着させないでください。複数の出版物が新しい証拠なしに提案を繰り返すことがあります。入門書が議論なしに一つの答えを示すからといって、合意があるともしません。合意の状況を把握するには、関連する最新の研究でどう扱われているかを確認する必要があります。

専門的な読みを評価する力量が足りなくても、有用な整理はできます。提案者を示し、公刊された理由を特定し、必要な追加調査を限定します。誠実さは沈黙を求めるのではなく、論争の説明と解決の区別を求めます。「古書体の判断を裁定できない」と述べた後、問題となる古書体上の点を説明すれば、正確です。

後で役立つ読書メモ

完全な題名、版、使ったページ、論証について自分で書いた一文を記録します。「この研究から引用できること」と「まだ確認していないこと」の二つの欄を意識します。前者には具体的な提案と推論、後者には紹介されているが開いていない文献の内容を置きます。長い文献一覧が、読んだつもりの誤った記憶を作るのを防げます。

最後に、この問いについて、使う、照合する、追加調査する、採用しない、の判断を記します。「採用しない」は論文が悪いという意味ではなく、自分の問題に答えないのかもしれません。効率的な研究は量のために文献を集めません。各資料の役割が分かり、書くときに取り出せる資料群を作ります。

抽象化によって、個別の読解では扱いきれない集合を研究できます。しかし各行は、資料の残り方が不均等で、解釈に注意を要する経緯を指しています。事例を残すことは、数えるのを諦めることではありません。単位、媒介、史料へ戻る道筋を見えるように保つことです。何を表し、何を除外したかが分かると、数値の価値は高まります。この正確さは、文書の告発を人物のアイデンティティーとして再生産することも防ぎます。

3つの尺度での確認

記録の尺度では、同定、欄、参照情報を確認します。集合の尺度では、カバー範囲、関係、分母を見直します。説明の尺度では、どの仕組みと文脈が解釈を支えるかを評価します。ある尺度では正しく、別では失敗することがあります。正確な情報票は適切な集約を保証せず、正しい合計は原因を保証しません。確認は3つすべてを巡る必要があります。

ウェブ、展示、授業で歴史の可視化に出会うたび、この手順を使えます。まず何を数えるかを特定し、次にどの記録が現れないかを問い、最後にパターンと語りの間をどんな飛躍がつないでいるかを検討します。過剰な主張を見つけるために、すぐに文書館全体へアクセスする必要はありません。ただし、確認済みの反論と未解決の問いを区別する必要があります。批判もその証拠に見合わなければなりません。

よく説明されたデータ資料室がもたらすもの

有用な項目は、定義、例、結果、限界を利用しやすく残します。ある読者はすぐ数値を探せ、別の読者はその構築を深く調べられます。浅い要約と、参照不能な根拠資料のどちらかを選ばせません。編集によって、最初の案内、展開、実習、参照資料という読解の水準を整理できます。重要な判断が、解釈に影響する場所で説明されていれば、深さを利用できるようになります。

物の測定にも供述にも、同じ注意が当てはまります。どちらにも、証拠と結論の間に連鎖があります。組成は原材料の産地を支持しても、誰がその物を所有したかは明らかにしないかもしれません。割合は資料群を記述しても、歴史上の母集団全体を再構成しないかもしれません。共通の能力は、各主張を利用可能な証拠の限界で止めることです。

具体的な習慣を残してください。単位、母数、出所を説明できない歴史上の数値は決して公表しないことです。次に、その数値が研究を助ける問いを加えます。そうすれば数値は、権威的に会話を終えるものではなく、共有する道具になります。読者が要約から記録へ、記録からそれを支える文書へ戻れるので、歴史は残り続けます。

21. 参考資料と調査の道筋

[1] Pitcairn, Robert 編。Ancient Criminal Trials in Scotland. エディンバラ、1833年。出発点となる編集資料群の歴史的な参考文献。Museum of Witchcraft and Magicのレコード「Isobel Goudie's (Gowdie) 1662 Confession from Pitcairn's Criminal Trials in Scotland」を確認したもの。レコードは出版上の一経路を裏付けるが、ここで刊本と写本を独自に完全照合したということではない。

https://museumofwitchcraftandmagic.co.uk/library/1390-isobel-goudies-gowdie-1662-confession-from-pitcairns-criminal-trials-in-scotland/

[2] Wilby, Emma. The Visions of Isobel Gowdie: Magic, Witchcraft and Dark Shamanism in Seventeenth-Century Scotland. 出発点の編集資料群によれば、初版はSussex Academic Press、2010年。参照したJSTORの電子版はLiverpool University Press刊、著作権表示は2013年。DOI 10.2307/jj.3485506。参照したのは紹介、目次、公開の抜粋であり、全文ではない。真正性の確認が進行中との言及は、その紹介に属するもので、現在の状態についての主張には変えない。

https://www.jstor.org/stable/jj.3485506

[3] Hall, Alaric. «Getting Shot of Elves: Healing, Witchcraft and Fairies in the Scottish Witchcraft Trials». Folklore 116、第1号、2005年、19–36頁。グラスゴー大学のリポジトリに収録された版。裁判の言語、分類、解釈条件についての分析を参照したもの。その論拠は例や参考文献とともに読む必要があり、遡及的な診断や各尋問の完全な再構成を可能にするものではない。

https://eprints.gla.ac.uk/3081/1/getting_shot1.pdf

調査を広げる方法

まず、使用した文書と版を特定してください。具体的な読みを調べるには、伝本や、それを確認できる校訂装置を参照します。ウィルビーの解釈を評価するには、出版紹介だけでなく、該当する章を読みます。ある回の条件を論じるには、固有の資料を探し、言及の不在と積極的な証拠を区別します。結末には固有の文書が必要で、自白の強烈さから推論することはできません。この展開は、The Method Filesのレッスン23と24の編集用DOCXの中核を保っています。参照ノートは、各節で由来を示して、レッスン5と17の資料を応用しています。「ニレの家」、イネス、それらの文書は架空です。ガウディについての新しい情報ではありません。デジタル参考資料の確認時期：2026年10月。